
雑踏の中で

結城 秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雑踏の中で

【Nコード】

N3010R

【作者名】

結城 秋

【あらすじ】

台詞のみで構成された、1話完結のSS集。

街の雑踏の中、あちらこちから聞こえてくる会話に、少し耳を敬ててみませんか？

放課後の教室の中で

「じゃあ、ナオ君はあんまり恋愛ものとかラブコメとか好きじゃないんだ？」

「そうだなー。あの作りものっぽい感じが、どうも」

「作りもの？」

「実際の恋愛ってさ、あんな良いもんじゃないよ」

「そうかなあ。例えばさ、私の友達で、最近10年来の幼馴染に突然告白されたー、って子がいたよ？」

「幼馴染ねえ」

「告白の仕方もうすごいロマンチックでさ、昔から2人がよく顔を合わせてたブランコに久々に腰かけて——って、聞いている？」

「きーてるきーてる」

「ぜーったい聞いてなかったよね今！ ナオ君は昔つから上の空になると人の頭越しに後ろの景色を見てボーっとするんだから！」

「おー、さすが10年ごしの付き合い。すごいすごい」

「えっ！？ い、いや、もう頭撫でられるような年じゃ……。って
いうか私の方が3カ月年上！」

にどの辺がそう思う?」

「話戻るのか。……うーん。例えば鈍感な主人公が相手の好意に気づかない描写とか。そんなワケねーだろって思う」

「あー、それはそうかも。わざわざ毎朝一緒に登校したり、ただお隣っただけで時々お弁当作ってあげたり、絶対好意の裏返しだって気づくよ普通」

「んー、それはまあ、俺とお前もそうだし、なんとも言えないかもしないけど」

「っ！ そ、そういえばそうだね」

「2人きりで良い雰囲気になったりとか、冗談っぽく相手の出方を伺ったりとか」

「それだと今のナオ君も同じになっちゃうけどね。やっぱりそれだけで好意とは言い切れないんじゃない?」

「はー。お前にはこれが良い雰囲気に見えるのかよ。相手をつねったり呪ったりしてるクセに……」

「何か言った?」

「い、いや別に。——って、例えば今の『何か言った?』『いや、別に』ってやりとりなんかも、もはや鈍い2人のやり取りのテンプレと化してるな」

「その場の空気で気づくだろ、ってこと?」

「まあ、そういうことだ」

「……そういう自分が気づいてないくせにね」

「え？」

「トイレに行ってくる、って言ったの。乙女に2度も言わせないの！」

「あーはいはい。『え、どこに乙女が』なんてベタなこと言わないから早く行って来い乙女」

£

「——ナオ君のばか。何がラブコメの主人公は鈍感、よ。自分だつて十分鈍いのにな」

「普通気づくよ、か。はっ、ついこの前やっと気付いた俺も、ちょっと鈍い部類かもな」

「私が何年前からナオ君に恋い焦がれ始めたと思っているのかなあ」

「いや、とんだ鈍感野郎だ。ユウキの気持ちにも、自分の気持ちにも」

「今日なんか絶好の話題だったから、結構攻めてみたつもりだったのに」

「今日は思い切ってアプローチしてみたつもりだったけど、あれだけやってもダメだったんだ」

「いいや。教室に戻ったら、いつも通りさりげなく」一緒に帰ろう”って誘う」

「そうだ。ユウキが戻ってきたら、今日は俺から」一緒に帰ろう”って誘ってみる」

「今はもっと自分を磨かなきゃ。いつかナオ君に、」

「ユウキの言ってた”ロマンチック”ってやつを精いっぱい演出して、今日こそ、」

「“好きです”って」

観覧車の中で

「責任……とつてくれる？」

「ドアが閉まるなり第一声がソレって言うのはどうなんだろうと俺は激しく疑問を抱いた」

「ほら、もう係員の人があんなに下に。もう誰からも見えない2人だけの世界だね」

「俺はこのドアを開け放つて飛び下りればこの現実から逃避できるのだろうかと真剣に考えた！」

「ヒサと、2人つきり……。はあと」

「ぎゃああああ気持ち悪い声を出すな！ あと『はあと』って口で言うな！！」

「まあそんなわけでボくら男2人が観覧車に閉じ込められているという『誰が得するんだこの小説は』的な状況な訳ですけども」

「誰に解説してんの！？ 普通に怖いよ！？ あれだけ誤解させるようなこと言つといて自らネタばらしするんですね！」

「そりゃあ、早めに言つとかないとそつちの需要に答えられないし」

「もはや何の話か全然分らない！」

「そりゃ腐じよ——」「ごめん分かってるからそれ以上言うな！」

「ふうー。ヒサのツッコミ癖も相変わらずだね。そんなに激しく突っ込まれたら、ボク、壊れちゃうよ?」

「……………」

「ああっ、放置プレイ! ボクのストライクをよく分かっていらっしやる!」

「ツッコまなくてもお前の変態度が大して変わらないことにガツカリだ!」

「あ、ほらヒサ、きれいな夜景」

「マイペースすぎだあああああ!!! つはあ、はあ……」

「そんなに息を荒げて……。やっぱりヒサも腐女子にサービスする気満々だね」

「だからこの俺とコウの2人だけの密室を誰が見てるというんだ、って自分で言いながら嫌な気分になってきた……」

「そりゃ読者に決まってるじゃん」

「やっぱりメタ発言ですよねえ! 1話を読んで『イイ話系』を期待した読者に土下座して謝れ!」

「え、1話ってBLじゃないの? ユウキが女だなんて、どこにも書いてなかったと思うけど」

「いや、最後に思いつきり乙女ってあつただろ!？」

「でもナ才君は乙女とは認めてないって口ぶりだったじゃん。やっぱりユウキも男で……」

「もうやめようこの読者も作者も1話の登場人物も俺らも誰も得しない不毛メタトーク!」

「仕方ないなあ……。じゃあ、愛の語らいの続きをしようか？」

「してねえよ!! ああ、なんでまだこのカゴは4分の1も回ってないんだ……」

「愛し合う2人の時間は永遠なのだっ」

「——あなさ」

「——うん、分かってる。ボクとヒサは、永遠にトモダチさ。それ以上も以下も無い。だって、男同士なんだから」

「——ごめんな」

「漚も趣味が悪いよね」。この観覧車が今日は”男女ペア専用”って知ってて、4人で並ぶんだもの」

「だってあの2人、この前の修学旅行以来ずっとギクシャクしてたじゃない。見てらんないわよ」

「修学旅行、か。あのウワサ、本当なのかな」

「耕が陽沙に告白したってウワサ？ まあ、ガチなんじゃないかしら」

「ガチって……。漚は時々言葉が乱れるよね」

「いいじゃないの、男ことばの1つ2つ使ったって」

「まあいいけど……。それで、ウワサの話だけど。やっぱり本当なのかな。確かに、陽沙は見た目はすごい美人だもんね」

「そうね。妬ましくなるくらいに。でも、神様は残酷」

「トランス・ジェンダー……」

「彼女、いえ、彼の強いところは、性別と容姿のどちらをも『自身』としてきちんと受け入れていること」

「ありのままの自分、かあ。やっぱり、男前だよな、陽沙は」

「——それはどうかしらね」

「えっ？」

「本当に男前なのは、どちらかしらね……」

£

「——ごめんな。俺、お前の気持ちに気づいていながら、応えられなかった。コウが、こんな俺でも受け入れてくれるって、すげえ覚悟を示してくれたのに。それなのに、俺は……」

「違う、違うんだよ！」

「違うないさ。俺は、お前の気持ちを踏みにじっていたんだ」

「それはボクの方なんだよ！」

「……どういうこと？」

「ボクは、ヒサとの友情に自信が持てなかった。傍から見ればどう見てもカップルだし、ボクは君の内面より容姿に惹かれていたのかもしれない」

「コウ……」

「それに、ヒサが僕のことを友達とってくれているかも、不安だ

った。何も信じられなくなって、ボクは、ボクは……」

「どんな形であれ、俺を自分のそばに繋ぎとめておきたかった」

「——その通りだよ。ボクはひどい奴だ。でも、今日久しぶりにヒサと話して確信した」

「当然だ、俺は——」「待って」

£

「そろそろてっぺんだねー」

「そうね。隣のゴンドラの2人はうまく行ってるのかしら」

「うーん。下りになれば後ろの私たちの方が上になるから、覗いてみちゃう?」

「よしなさいな、趣味の悪い……」

「とか言いながらさり気なく席を移動するあたりが濡らしいよね……」

£

「だからボクは、もう一度この場所で、修学旅行の時と同じこの観覧車のでっぺんでヒサに告げる。——ボクは、君が好きだ。ただし、今度は友達として。ボクの、親友になってほしい」

「っ……!!」

「どうだまいったかヒサ！　ってうわわっ、泣かないでよ！　もう、ヒサってば普段は男らしいクセに、肝心な時に涙もろいんだから……。その涙だけでそこらへんの男なんてイチコロだよ？」

「天然で中性顔のコウには言われたくないな……。お前だって女装したら俺よりも女らしくなるんじゃないか？」

「なにをう！　くそお、絶対にヒサより男らしくなってみせるんだから！」

「ははっ、望むところだ。じゃあまず、どっちが先にカワイイ彼女を作れるか勝負だな」

「望むところだっ！」

「——あ、見てみるよコウ。灯台の明かりがきれいだ」

「ホントだ。この前は見えなかったのにね。きれい……」

「遠くまで見渡せるのは、お互い、胸のつつかえが取れたからかもしれないな」

「詩的だねえ」

£

「きれい……。灯台の光って、こんなにも明るいんだ」

「そうね。でも、光が筋になって見えるのは、空気中のチリに光が反射しているからなのよ」

「そっかあ。——ねえ、漣」

「なあに、明子？」

「私は、あなたのことをとてもよく知っている。トランス・ジェンダーに苦しんでいることも、その中性的な顔立ちが時にすさまじく凛々しいことも」

「……………」

「でもね、時々不安になるの。あなたは、私のことをどう思っているんだろう、って」

「それは……………」

「だからね、漣」

「――私が零のこと好き、って言ったら、驚くかな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3010r/>

雑踏の中で

2011年10月8日19時42分発行